

栃木のNPO 継続の秘訣

信頼と多様性で 社会に溶け込む

社会問題を解決したいという高い志から始めたNPOが目的を達成するために課題となるのが、活動を長く続けて成長・発展していくことだ。ヒト、モノ、カネのない尽くしのなかで、栃木県のNPOは事業を継続していくためにどのような工夫をしているのか。2つの団体の取り組みからヒントを探った。

北関東 フォーカス



書籍の片付けをしながらコミュニケーションをかかさない「えんがお」のメンバー(写真上)。「トチギ環境未来基地」の森でのボランティア活動には昨年、のべ1700人強が参加した(同下)



企業発展のヒントにも

「おばあちゃん、来たよ」。6月の昼下がり、栃木県大田原市で独り暮らしをしているお年寄りの女性(84)を訪れたの

は、高齢者の生活支援などを手掛ける一般社団法人「えんがお」代表理事の浜野将行さん(26)と大学生ボランティアの小林千恵さん(21)。女性に家族が残した書籍の整理を頼まれたのだ。

2人は押し入れなどにしまわれていた大量の本を足腰が不自由な女性にかわって整理し、段ボールに詰めた。

えんがおはちよっとした困りごとを引き受けてる。その機会を利用して高齢者と若者が世代を越えてコミュニケーションする場をつくるのが狙いだ。仕事が一段落すれば、アイスを食べたりお茶を飲んだり。外出も困難で孤立しがちな独居の高齢者の心を開いていく。信頼が事業のベース。営利企業だと気軽に2階に上

げてもらえないのでは」と浜野さんは話す。電球交換や掃除など簡単な作業なら30分500円。半日働いても数千円にしかならない。だが、浜野さんは悲観してはいない。気軽に頼める信頼関係があるからこそ可能なビジネスもあるという。「荷物を持って」「階段で手を貸して」と気軽に頼める人がいれば旅行に行きたいと思う高齢者は多いはず。そんな高齢者との交流会を開けば収益は2ケタ大きくなる」と浜野さん。法人設立からまだ1年だが、6月の依頼件数は過去最高の30件を超えた。

栃木県益子町に本拠を置き森林を保全する活動をやる「トチギ環境未来基地(TCC)」の塚本竜也代表は「多様な切り口を用意し、参加する機会を幅を広げることが重要」と語る。

TCCの事業の柱は、若者が3カ月泊まり込みで里山再生に取り組みむの。だが、それだけだと「環境やNPO運営に関心がある層しか参加が見込めず、整備面積は広がらない」(塚本代表)。

そこで、アジアから来たボランティアと英語を使いながら森づくりをする高校生向けのキャンプをしたり、子ども食堂と連携した自然体験キャンプを開催して子どもの貧困に関心がある層を取り込んだりと多様なプログラムを用意する。

「切り口がいろいろあれば、企業の社会的責任(CSR)に関心を持つ民間からの支援も得られやすくなる」と塚本代表はみる。NTT東日本やかんぼ生命、シチズングループなどの大手企業が毎年、研修を実施したり、寄付を寄せたりする。

えんがおの事業継続の一番の基盤が「信頼」なら、TCCは「多様性」がキーワードだ。さらにNPO論が専門の石井大朗・宇都宮大学准教授は「組織を運営するうえで一番大切なのは説明責任をどう果たすかにある」と説く。専門家の間では、活動の主体が専門性や意欲のある一部の市民に偏っていることが日本の問題点だとよくいわれる。これを踏まえ、石井准教授は「情報発信を進め、より多くの人の参画を得ながら活動の裾野を広げ、公共の担い手として社会の中の基盤を強めていく必要がある」と強調する。

信頼、多様な切り口、説明責任といったコンセプトは、NPOだけでなく、企業の発展・成長のヒントになるかもしれない。(宇都宮支局長 花淵敏) 次回から土曜日に掲載します